

# 前近代経済における貨幣，信用，国家： 古代メソポタミアから中世ヨーロッパまで

明 石 茂 生

## 1. はじめに

過去に遡って人間の活動の本質を探るという姿勢は、アプローチとして特異なことではない。この背景のひとつには、プリミティブな世界にこそ人間の本質がより露わに表出するという人類学的な基本姿勢がある。もうひとつには、時間の経過の中で人間は行動上進化していくとしても、それが可能になるのは人間の知的活動の蓄積があるからであり、人間の行動の本質的な部分においては現在と過去の間には大きな差異があるわけでないという（歴史学的な）姿勢がある。この立場からすれば、知の蓄積という部分をフィルターにかけて配慮すれば、過去の人間の行動は現代のものに匹敵すべき有意義な情報を提供しうることになる。本稿の主題は、貨幣経済をどう理解していくべきかであり、その舞台を前近代（古代・中世）に設定したのであるが、この時代設定はこれらの視点からみれば、主題に応えるうえでハンディキャップになるというより、むしろ理解を促進するものになりうると考えられるのである。

以下では、前近代において貨幣経済を理解するために次のような分析視点を念頭に置いて論述を展開していきたい。第一に、貨幣は何よりも交換手段として創造され進化してきたことである。交換の世界において、直接的交換の形態から間接的交換へと取引費用を節約する動機づけが手伝って、交換対象となる商品のうちから交換媒体となる特別の商品が選択され、貨幣財として進化してきたという考えが背景にある。すでに C. メンガーにより、それぞれの商品には販売可能性 (absatzfähigkeit) のレベルがあって、そのなかで高販売可能性を有した商品が一般的な受領性を獲得して貨幣として進化していくという考えが提

示されていた<sup>1)</sup>。さらに、交換は頻繁に行われることにより市場へと制度的に発展していくのであるが、その際市場の特徴となる分業化の過程が進行するとともに交換の仲介者(商人)と貨幣が出現するという考えがA. スミスによって提示されていた。J. ヒックスはその考えを発展させて、それら仲介者となる商人たちが集団として分業化と貨幣、その他法的枠組みを創造し、市場の発展・拡大へと導いていく担い手になったと考え、商人集団によって形成される経済を商人的経済として概念化した<sup>2)</sup>。

このような交換の世界(地域市場圏)から進化的に現出した交換媒体(商品貨幣)は、そこに属する交換の担い手たちによって一般的に受領されると信条的に共有されることにより機能するわけであり、これは地域市場圏それぞれに特有の貨幣が存在しうることを意味する。実際、穀物、布帛、金銀銅など鉱物、貝殻などが地域に応じた固有の交換媒体(貨幣)として使用されていた。他方これら地域市場圏には特有の産物があり、市場圏をまたがって交易をおこなう商人たちが存在して、彼らの間で保有される高次の貨幣(外部貨幣)もまた存在していた。つまり地域貨幣とともに遠距離交易に対応した外部貨幣が市場の階層化と連動して交換の世界では自然に生まれ出てくるのであり、現実には銀(場合によって金、銅)がその代表者として使用されていた。

第二は、国家支払い手段としての貨幣という視点である。国家は強制力に優位性をもった組織体といえるのであるが、その強制力を背景にして国家に所属するひとびとが従うべきルールまたは諸制度を設計する当事者でもある。国家が設計する制度の一環として貨幣も存在しており、国家によって設計された貨幣(硬貨)はもっぱら国家によって供給されることになる。国家は強制力を発揮するために(軍隊を含めた)政府要員を組織として扶養しなければならない、そのために必要な財・サービスを調達しなければならない。すなわち、国家は所属する人民の多くに租税として財・サービスを負担させ、政府要員に給付し、また公共事業や軍費費として支出する巨大な経済主体として行動する。国家の支払い手段としての貨幣は、現物負担と給付とは別に、租税収入と政府支出を実現する手段として登場する。

第三の視点は、貨幣と信用の関係である。信用は貨幣とは別の概念として本

---

1) Menger (1871: 253).

2) Hicks (1969: 63-65).

来存在するが、貨幣が交換手段ならびに価値尺度としてもっぱら使用される貨幣経済においては、信用も同様に貨幣単位で出現する。貨幣経済では、貨幣は交換媒体としてさまざまな経済主体の間を移っていくのであり、マクロ的視点から見ると経済全体として資金が循環する過程がみられることになる。この資金循環過程が貨幣経済の大きな特徴となるのであり、信用はその循環過程を補完する存在として登場する。

古代において貨幣は早くから登場していた。しかし、古代から中世にかけて貨幣がその品質を同一にして経済の隅々にまで行きわたるほど十分に供給されることはほとんどなく、常に流動性不足と品質の不安定化に悩まされることが多かった。流動性不足と貨幣品質の劣化とともに、経済主体の間に存在する資金と情報の偏在は資金循環過程を阻害することになる。この障害を克服し資金循環を促進する担い手として信用を供給ないし媒介する金融仲介者が登場する。資金循環を滑らかにする領域は大きく2つに分かれる。ひとつは、事業者（商人）と資金提供者を結びつけるパートナーシップであり、もうひとつは商人の運転資金を調達提供する金融仲介者（銀行）である。預金、貸付、為替という銀行の固有の業務は、振替、為替、口座決済、手形割引などで象徴されるように歴史的な経緯を経て発展してきたのであり、同調するように金融仲介者の形態も変化・発展してきた。

以下の節では、これら3つの分析的視点に留意しながら、古代メソポタミア、プトレマイオス朝エジプト、中世イスラム世界、中世西欧世界の4つの事例をとりあげていく。これら4つの事例を通じて、前近代の貨幣経済をどのように理解するべきかという主題に迫っていくことにしたい。

## 2. 古代メソポタミア

2つの大河に挟まれた地域であるメソポタミアは、肥沃な土壌から生産される穀物と周辺で産出される羊毛から製造される毛織物に優位性を有していた。対して、鉱物、石材、木材、その他特産物など物資はイラン、アナトリア、コーカサス、湾岸地域などから調達せざるを得なく、メソポタミアは古来より交易を必須とする経済構造に置かれていた。交易はこの点で歴史以前の時代から行われてきたといってよい。この節では、古アッシリア（前20世紀後半～全18

世紀前半), 古バビロニア(前19世紀~前16世紀前半), 新バビロニア(前7世紀後半~前6世紀)を扱うことになるが, その取扱いは粘土板文書が数多く発掘されて, 経済事情に関わる情報とそれによる研究成果が比較的多く入手されやすいという事情に負っている<sup>3)</sup>。

メソポタミア周辺地域へ遠距離交易を実行せざるを得ないという地理的意義は, ひとつは交易ルートの拠点となる都市に交易上の優位性をもたらしたことであり, もうひとつは交易用資金を提供してもらうためにパートナーシップ(出資者と事業者との共同出資事業)契約を結ぶ誘因を交易商人から引き出したことである。チグリス河中流域にあるアッシュールはバビロニア, イランとアナトリア(トルコ)との交易中継点にあたり, 前20世紀から前18世紀にかけてアナトリアとの間には30もの商業居留地を設けてアッシュールとの間に交易活動を継続させていた。とくにアナトリア中部にあるカネシュに商館があり, アッシュールとの交易のみならず, アナトリアで交易に従事するアッシリア商人との交易の拠点にもなっていた。すなわち, アッシュールから錫や毛織物入手しカネシュまで持ち込んで売却し, 銀を得てアッシュールに送っていた。またアッシリア商人たちはカネシュを拠点にしてアナトリア各地で交易活動を営み, 現地の産物の価格差を利用して利益を拡大させていた<sup>4)</sup>。

古アッシリアの交易は, 交易に責任をもつ商人(tamkārum)と代理人などから成る家族企業によって実施され, 資金は他の市民などの投資家によって提供されていた。資金は共同出資の形で集められ, 一定期間交易活動を行い, 得られた利益は出資額に応じて分配されるというパートナーシップ契約(naruqqum-contract)が結ばれていた。交易をおこなう組織(ellutum)は商品の共同輸送のための組織形態とってよく, 出資された資金は代理人に渡され, 交易事業ごとに利益が計上されて代理人と投資家に分配されて, 投資家分は再投資されて交易事業は継続して行われていた<sup>5)</sup>。償還前に資金を引き揚げる場合の条項も契約の中には盛り込まれ, 権利の譲渡や相続の対象になることも認められており, 長期的なパートナーシップに対応したルール形成が古アッシリア交易には成立していた<sup>6)</sup>。

3) 古代メソポタミアの環境, 政治体制, 交易事情については明石(2015)を参照されたい。

4) Lassen(2010: 170-74).

5) Larsen(1977: 132-36).

古アッシリア時代の最後の2世紀と同時期，古バビロニアでもパートナーシップ契約がみられていた。ただ，その契約の対象は単一の事業に向けられており，投資家も原則一人（または二人）であった。とくに海外交易や農業事業に向けられたパートナーシップ契約（tapputu-contract）が有名であり，例えばベルシャ湾をまたがったデイルムン（バーレーン）向け交易がウル商人の間でパートナーシップ契約として結ばれ実施されていたことが知られている<sup>7)</sup>。海外交易という極めてリスクの高い事業が対象となる場合，投資家は一回限りの事業にして分散投資をしていたと考えられ，継続的な基金形式で海外交易に対し投資を続けるという発想法はなかったと思われる。この点で継続的な分散投資を行っていた古アッシリアのパートナーシップ契約とは対照的である。

この他に，バビロニアの交易都市シッパルを拠点にして，いくつかの家族によって構成された商人組織により遠距離交易，借地農，建築事業などが営まれていた。その中の交易事業ならびに商業的共同事業には組織外の商人も含めてパートナーシップ契約を通じて資金が提供されていた。遠距離交易ではバビロニア産織物をアッシュール経由で金や銀と交換し，そのほか大量の金属（銅，鉛，青銅など）を周辺地域から交易で輸入していた。これら交易事業は組織内の商人により彼自身の責任で行われていたが，それ以外にもパートナーシップ契約で，組織外の商人も含めて商人たちが資金を投資して組織の事業が行われており，また商業目的で大量の銀が組織内部で管理されていたことがわかっている<sup>8)</sup>。

古バビロニア前期社会において，銀や大麦は貨幣として広範囲に使用されていた。とくに大麦は農産物（商品）であるが，安価な貨幣（交換媒体）として一般に受け入れられていた。実物資産（土地）や労働はともかく，農産物や非農産物は自由に売買され，輸入素材（金属，高級石）も需給の動きに従って価値が変動していた。労働については賃金や穀物給付などが労働の需要と反応して

---

6) Larsen (1977: 144), Veenhof (1997: 345).

7) Oppenheim (1954: 6-17)

8) このほかに商業・企業ローンをみていくと，商品を引き渡す前に銀や大麦を受領して後に商品を引き渡すという「信用買い」の形態や，同じ組織内のメンバーで信用売りを行う場合とか，さらには身内に資金（銀）を貸付して農業事業を行い，収穫した農産物の売却から返済するなど，一種の投資事業に似たケースもみられ，その一部はパートナーシップ契約に属するとも解釈されている。Goddeeris (2002: 388-89).

動くことは少なかったが、王室事業やほかの組織のために労働力の調達を行っていた仲介者 (iššaku) は労働不足を利用して利益を得ていた。このように需要と供給の関係で価格が変動するという意味合いで、市場原理は古バビロニア前期の社会において多くの分野で重要な役割を果たしていた<sup>9)</sup>。

次に、新バビロニア時代の経済、すなわち新バビロニア王朝期ならびにペルシャ帝国初期(紀元前7世紀末から前484年)までの期間は、農業生産が増加し、市場志向が強まり、合わせるように都市における非農業部門の成長と、労働力の専門化と取引の貨幣化が進行し、全体として消費水準の上昇が見られた時期であった。その経済発展の引き金は人口増加にあり、国家主導の土地や運河などへの投資とその顕示的な消費支出により人口増加と都市化が促進され、それが農産物への需要を促して、生産性の上昇と産物の特化をもたらした。都市は消費センターとしての役割を果たし、その消費需要は地方から都市へ繋ぐ市場網を経由して生産者に農業余剰をもたらし、高水準の生産と消費が実現し維持されていった。その市場網の中で、企業者は事業を展開することにより地方と都市を結びつけ、貨幣経済の進行を促す担い手になっていた。

企業者による事業展開については、(ハルラーヌ *harrānu* と呼ばれる) パートナーシップの広範囲な適用が見られた。パートナーシップの形態としては投資家と事業者(エージェント)という片務的な関係があげられるが、それ以外にも投資家が事業者をかねたりする多様な双務的關係も存在していた<sup>10)</sup>。パートナーシップにより形成される事業体(会社)は、固有の名義をもった形式的法人としては認識されなかったものの、その資産は投資家の資産とは区別されていた点で実質的な法人的組織を形成していたといわれる。債務関係についても、あるパートナーに対する債務を負った第三者がいた場合、その第三者は他のパートナーや会社全体に自動的に債務を負うわけではなかった。他方逆の場合、つまり会社のパートナーの誰かが商取引のために負った債務は会社のために生じたものであれば、他のパートナーを巻き込み負担義務を負った<sup>11)</sup>。このようなパートナーシップ事業は、規模としては2人や3人で構成されることが多く、資産も中庸な規模であり、その制限下で企業者的な活動を行っていた<sup>12)</sup>。

9) Goddeeris (2002: 384-85).

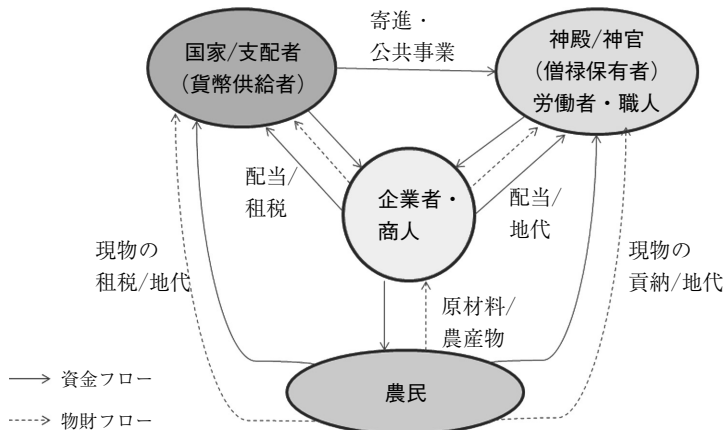
10) Jursa (2010b: 56-58).

11) Lanz (1976: 111-116), Jursa (2010b: 57).

パートナーシップによる事業の分野は広く交易、農業、工芸などに及んでいた。交易事業、とくに遠距離交易はハルラーヌ *harrānu* がもともとビジネス旅行を意味していたことから、パートナーシップの原点となった事業であった。エジプト、イランからの奴隷、シリア、レバントからのワイン、レーズン、染料などがバビロニアへ輸入され、織物や農産物などが逆に輸出されていた。また近郊ないし都市間の交易では、都市部への農産物の供給、工芸品、外来品などの市場取引などに企業者がかかわり、結果バビロンはそれら事業による交易の中心地になっていた<sup>13)</sup>。

新バビロニア経済では、人口増、土地開発、運河網の整備、ならびに消費需要に見合った生産物の特化と生産性の向上などといった総供給面の改善と、国家の建設事業によって生まれた建設関連物資の需要と労働者への賃金支払いによる派生的な消費需要、そして人口増から都市へ流入した都市住民の消費需要といった総需要の側面が好循環で相互に関連しあって展開していた。そこには図1のように、マクロ経済的な資金循環の体系が形成されていた。アッシリアやシリアから得られた銀塊が大量の貨幣として国家事業による支出を通して供給され、それが企業者や商人を通じて帝国内で流通し、租税、貢物として政府へ還流し、その過程で帝国の経済が発展していくという図式がみられたのである。

図1 バビロニア経済の資金循環



12) Jursa (2010b: 59-62).

13) 交易経路ならびに商品については Graslin-Thome (2009: 183-284) を参照されたい。

ところで交易などに従事する商人(または代理人)がパートナーシップにより長期的な資金を調達するのとは別に、個々の取引の際に、短期的な借り入れや信用売買により運転資金や商品の買い入れを実現することが多い。古アッシリアの時代でも、アッシリア商人の間で信用取引が行われていた。

とくに多かったのは、商人(tamkārūm)に委託して少量の商品を委託販売するケースである。彼らは委託販売の商品を受け取って債権者(商人)の代理人(エージェント)として行動する代わりに、銀建ての債務額と支払期限、期限超過分には利子負担を書いた債務証書に署名した。結果、商人たちは大量の債券、債務証書を抱え、保管し、債権の回収を図らなければならなかった。

商人(tamkārūm)が保有した債務証書は、比較的小さな金額で、債権者の名義が単に tamkārūm と書かれて匿名であるものが多くあった。このような証書は交易者間で普通に譲渡されており、いわば信用状または小切手として機能していた。債務者はこの証書の所持者(持参者)に債務の支払いを行うわけで、このような債権の移転は金額自体が小さく、かつ相互に知り合いの関係であるような状況で可能になったと考えられ、また単なる債権回収だけでなく、債権の売却によって現金化のニーズも充たされることから商人たちの間で受け入れられていったと考えられている<sup>14)</sup>。

このような債権の譲渡化は古アッシリアではいち早く紀元前19世紀から導入されていたが、古バビロニアでは「持参者条項」の伴った債務証書の出現は百年遅く紀元前18世紀にみられた<sup>15)</sup>。その際債権者の名前は明記され、匿名名義 tamkārūm は使われなかった。それら債務証書は王宮や公共経営体(神殿)がらみで発行されており、例えば王宮から羊毛を受け取った取引者に対して、持参者条項付の債務証書(タブレット)が発行され、取引者はそのタブレット持参者である「王宮の使者」に対し、対応する銀を支払わなければならなかった。

さらに公的経営体の高官により銀が旅行商人に与えられ、交易が終わって帰国したのち、タブレット持参者に支払いが行われることが契約の条項に書かれることもあった。また別の記録では、タブレット持参者は地方レベル又は遠距離の私的取引の関わりで現れることが記載されていた。持参者条項の書かれた

---

14) Veenhof (1997: 358).

15) Pruessner (1928).



タブレットが取引関係者の間で譲渡され、持参者はメソポタミア都市の *kārum* がある港や商業地区で債務者と出会い、支払いが行われていたのであり、そのような債権の譲渡と債務の履行・清算が容易に行われていた<sup>16)</sup>。

新バビロニア時代になると、交易事業のほかに王室や神殿の土地経営や地代徴収などの業務を委託されて利益をあげる企業者が現れて、付随して信用供与もおこなわれていた<sup>17)</sup>。前5世紀末または前4世紀初めには、資産家から資金を預かる預金引き受け業務も行う企業者がバビロンに現れ、預金者による支払い指図書が発行とその持参者への支払いを受け入れる預金銀行らしき形態が出現したといわれる<sup>18)</sup>。

### 3. ヘレニズム時代：プトレマイオス朝エジプト

貨幣（硬貨）がエジプトに本格的に導入されたのは、アレクサンドロス大王のエジプト征服時であり、その後を引き継いだプトレマイオス朝においてであった<sup>19)</sup>。大量のアレクサンドロス貨が供給された後も、エジプトの実質支配者であったプトレマイオスにより同通貨がエジプトにおいてもより軽量の単位で発行されていたが、306BCに国王（プトレマイオス1世ソテル）に推挙されて、王国固有の硬貨が発行されるようになった。その後の過程で、エジプト内に全面的ではないが貨幣経済が浸透し、前2世紀にはエジプト神殿まで完全に貨幣経済の中に取り込まれていた。さらに銀行家はすでに1世ソテル時代に私的銀行家として存在しており、その後王立銀行、（外貨両替を扱う）認可銀行が設立されたが、後者は紀元前3世紀末に外貨交換が禁止されるとともに消滅していった。前2世紀以降になると、私的銀行家が両替を主要業務にして再びみられるようになった<sup>20)</sup>。エジプト特有の王立銀行 (*basilikai trapezai*) の設立にあたっては、ヘレニズム世界で顕著となった国家銀行の影響があったとされる<sup>21)</sup>。エ

---

16) Veenhof (1997: 360-61).

17) 新バビロニア時代の金融仲介者（企業者）による信用供与については、Bogaert (1966: 105-23) を参照されたい。

18) Jursa (2006: 168-71, 2010a: 245).

19) ヘレニズム期東地中海における貨幣鑄造と交易に関するより具体的な議論については明石 (2017) を参照されたい。

20) Bogaert (1994: 57, 1998: 169-70).

ジプト国内では租税納付や賃金支払い、小取引における貨幣(硬貨)の使用という貨幣経済化が進んでいくが、その制度上の転換にあたってプトレマイオス2世(フィラデルフォス)が実施した改革(265/64BC)は見落せない。

改革は次のような事項で行われた<sup>22)</sup>。第1は租税徴収のみならず独占事業、公共事業において全面的に請負(farming)システムがとられたことであり、第2は王国固有の銀貨が鑄造されたが小取引をよりスムーズにするため青銅貨が大量に発行され、実質上青銅本位制となって地方経済(ノモス)内の資金循環を支えたことである<sup>23)</sup>。第3は王立銀行を国内に立ち上げ、各ノモス(州/県)を中心に王立銀行・支店網をつくり、請負、納税、政府支出を含めた州政府の経済活動の円滑化を図ったことであり、最後にセンサスを実施し、土地、人口調査を行い、人頭税や労役賦課のための基本台帳を作成したことである。改革はこれら制度的要素を組み合わせて、王国内で閉じられた通貨システムを通じて国内を貨幣経済化して統治しようとする試みであったといえることができる。

王国内はノモス(州/県)という行政単位で区画され、固有の経済循環システムが形成されていた。各ノモスは州(nomos)、郡(topos)、村(komê)の3層構造になっており、それぞれに行政官、書記が配置されていた。財務面ではトップに財務官(oikonomos)が置かれ、郡、村にそれぞれの地方財務官が配置され、さらに州レベルで会計上の監査のため監察官(antigraphus)が配置されていた。また州財務官の直下に王立銀行があつて、3層構造に沿って銀行、銀行支店、収税署(logutêrion)が存在していた。各ノモスには租税、公共事業、(ごま油、ビール、塩、パピルス、織物などの)独占工房の請負業者がいて、耕作者としての農民がおり、州政府に勤務する官吏、軍人(兵士、傭兵)、在地軍人、地主そして商人または流通業者などがいた。

貨幣経済化が自然には進んでいなかった地方では、各種請負と租税納付により資金の移動が行われ、祭祀や公共事業、買い付けなどの州政府支出や官吏・軍人等の消費行動により資金が循環する構造が人為的に出来上がっていた。センサスを通じて塩税(人頭税)が農民に貨幣納の形で賦課され、対して公共事

21) Bogaert (1994: 39-40).

22) Manning (2010: 128-57).

23) 銀ドラクマと青銅ドラクマの交換比率は、ca.265-220BCには1:1であったが、ca.220-200BCには1:2、ca.200-180BCに1:60、ca.180-164/3BC、ca.130-30BCに1:120となつて、王国の銀不足と青銅貨の大量発行の状況を反映していた(von Reden 2010: 151)。

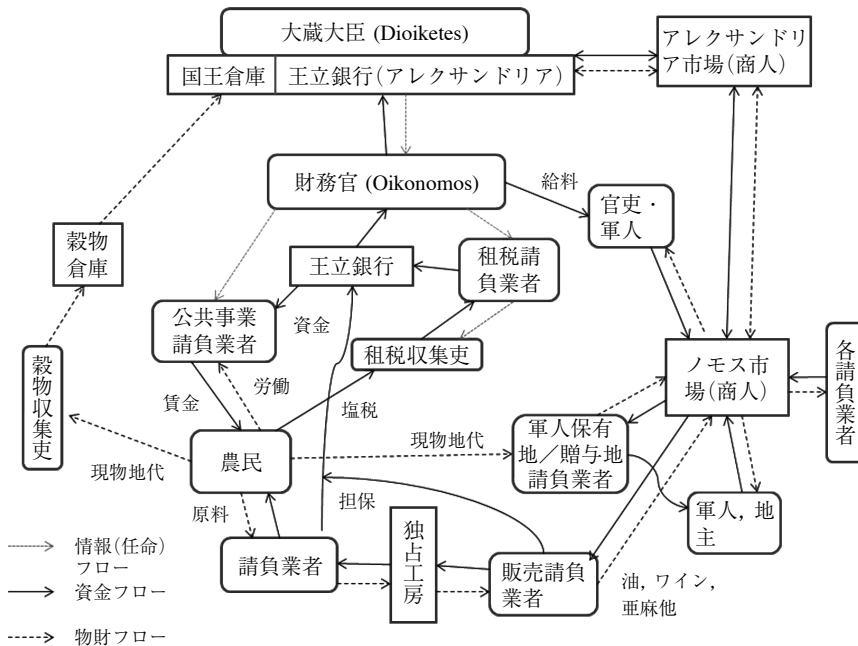
業（とくに灌漑水路の補修）に強制的に駆り出されて、請負業者を通じて賃金が支払われ、塩税納付の資金源となっていた。そのほかに独占工房向けの原材料が割り当てられ、その対価が支払われていた。独占工房はまた生産と販売の請負業者がいて、その産物は独占的に州内で供給され（一部政府により買い付けられ、残りは市場で）販売されていた。農民は王領地の請負人（小作人）として行動し、地代を現物で納めていた。その穀物は収集官吏（sitologos）によって集められ、地方の穀物倉庫に一端納められ、必要分以外はアレクサンドリアの国王倉庫に集められ、エジプトの有力な輸出産物として販売されていた。在地軍人には軍人保有地（klêroi）があって、そこにも請負業者が介在し、作付け、収穫、販売を請負い、地代を貨幣で納めていた。州政府役人（官吏、兵士）も俸給を受けて消費を行い、州政府自身祭祀や公共事業、宮廷関係の支出を行っていた。一般に政府に関わる請負業者は、オークションを通じて請負を認可され、予め担保（証拠金）となる金額を納めなければならなかった。

これらの貨幣を通じた受け取り、支払いはほとんどが王立銀行を介して行われていたのであり、租税、担保などは銀行の政府口座に振り込まれ、また公共事業などの資金も請負業者の口座に振り込まれていた。農民は塩税収集の請負業者やその代理人、収税吏（logutês）から受領証をもらい、納税の証明とした。村落ごとの銀行支店や収税署に蓄積された余剰資金は州都の王立銀行に集められ、地方政府への支払い分を差し引いた余剰分は、銀貨に直して首都の国王金庫に送金されていた。それら王国の（貨幣、穀物など）収入と支出の財務一切を統括していたのが財務大臣（dioikêtês）であり、王国の官僚組織の頂点に立つ存在であった<sup>24)</sup>。

さらに政府関係者（官吏、兵士）、在地軍人、地主、請負業者、農民などといった人々は、稼得した収入のもとでノモスごとに存在した市場（商人）を通じて物資を購入していた。王国内で調達できない分は、海外を通じてアレクサンドリアの市場にて調達されたはずであり、国内全体を見ると首都・州都・郡邑の階層ごとに市場が形成され、これら階層化された市場ネットワークを通じて資金が還流して最終的に王国全体の資金循環が閉じられていた。その際、各ノ

24) ブトレマイオス朝の地方行政組織、租税制度、産業独占一般については例えば柘植（1969）、各種租税と受領証については Muhs（2005: 41-84）、租税、地代、賃金については von Reden（2007: 84-150）を参照。

図2 プトレマイオス朝ノモス経済



モスではおもに青銅貨が使われて、ノモスごとに資金循環を遂げられていたとすれば、首都向けの資金（主に銀貨）はノモスごとにどこからか調達されていたはずであり、独占工房や神殿、軍人保有地、贈与地から供給される特産物や農産物が市場ルートを通じて首都ならびにその他の州都向けに販売されて資金が還流していたと考えられる。その資金が各種租税や請負担保金の形で州の王立銀行に集められてノモス内の支出分を控除した余剰分が最終的に首都に送金されていたと理解され、図2で集約されるように、エジプト王国内で市場ネットワークが改革と併せて同時に（またはそれ以前に）形成されていたと考えることができる。

王国の商取引のシェアは限られていたとはいえ、ノモスの州都ならびに首都、そして海外向けに様々な取引が行われていたと想定され、王国の銀行家が徴税と州政府支出の財政業務だけでなく、顧客との間のネットワークの枠内に限定されながらも、私的取引に対応した資金決済、移転、融資を行っていたと考えられている。王立銀行の機能は「ノモス（州）政府の貨幣供給を保証し、個人顧客の取引を実施する」<sup>25)</sup> ことにあったともいわれ、政府に勤務する官吏、軍

25) von Reden (2007: 256).

人のみならず、請負業者を含めてそれぞれの口座に資金が振り込まれ、または支払われることにより、振替 (giro) がなくても一銀行内の口座間で資金移転が可能であった<sup>26)</sup>。

口座保有者は銀行に向け支払指図書 (written orders of payment) を送ることにより、代理人が遠隔地で取引を行うことを容易にし、口座がなくても貨幣支払いや受け取りを銀行が受け付けることにより異なる場所での資金管理が可能となり、その記録は取引の法的保障を与えることにもなった<sup>27)</sup>。ただし、それら指図書はあくまでも口座保有者や代理人、銀行の間の個人的知己の關係に限っており、為替とはかけ離れたものであった。つまり、前3世紀においては「ギリシア人のみ、とくに特権的地位をもった在地軍人、国王スタッフが口座を保有し、銀行はギリシア文化と政権の次元内で位置づけられる」<sup>28)</sup>のものであった。他方では、ギリシア人とエジプト人との同化が進んでいった前2世紀になると、すべての階層が支払いを行うために私的銀行を使っていたとされている。ボゲールによれば「紀元前2世紀のエジプト銀行の顧客と前4世紀のアテナイの銀行顧客を比較したとき、エジプト銀行内では大きな民主化が進展していたといわざるをえない」<sup>29)</sup>のである。

前3世紀半ばには銀行への支払指図書が見出され、その形式も二重文書から単一文書に簡素化されていったが、前1世紀になると口座保有者が別の銀行への資金移転と指定受取人への支払いを指図する文書がいくつも現れ、正副 (控え) があって小切手として使用されていたと推測されている<sup>30)</sup>。ただし支払人と受取人は知己の關係にあり、第三者への譲渡は可能でなく、完全な交換手段としては機能しなかったが、現金移動だけでなく、銀行間の債権債務の発生により資金移転があったとして、貨幣使用を節約する機能を持っていたと考えられる<sup>31)</sup>。

---

26) von Reden (2007: 257, 269-75).

27) von Reden (2007: 290).

28) von Reden (2007: 294).

29) Bogaert (1998/99: 138-39).

30) Bagnall and Bogaert (1975), Bogaert (1994: 245-52).

31) Bogaert (1994: 252).

#### 4. 中世イスラム世界：アッバース朝，ファーティマ朝

7世紀前半からきわめて短期間に，イスラム教徒による支配領域は東は中央アジアから西はスペインまで拡大し，続いて成立したウマイヤ朝やアッバース朝の歴代のカリフによって，バリード（駅通制度），貨幣（金銀複本位制），度量衡の統一，市場地区の整備などで代表されるようなインフラの整備が行われたことにより，きわめて広範囲にわたる商業ネットワークがイスラム世界において形成された。イスラム教はキリスト教と同じく徴利（リバー）の禁止を謳っていたのであるが，キリスト教が禁欲的な精神世界を求めて利潤追求にもとづいた商業活動に対し否定的な態度をとっていたのに対して，イスラム教では商工業活動による利益はコーランの中でも謳われていたように労働の対価として解釈されて自然に受容されていたのである<sup>32)</sup>。

この利益追求に対する教義上の姿勢の違いが，中世前期におけるイスラム世界とヨーロッパ世界との間の経済的活動の格差を反映させていたといってもよいかもしれない。実際，徴利の禁止は両世界において貸付行為もしくは金融活動一般に対し精神的ないし法的制約をもたらしたわけであるが，利益追求を労働の対価として受け入れていたイスラム世界では，貸付行為をも通常の商業的取引ないしは共同出資事業（パートナーシップ）の一環として解釈して，経済活動上の障壁を乗り越えようとしていた。それに対し，中世ヨーロッパでは商業上の同様な解釈と工夫の出現は遅れて，十字軍派遣以降の後期になってようやく顕著にみられるようになったのである。

イスラム国家によるインフラ整備の中には，先に触れた駅通，通貨，度量衡などの整備・統一のほかにも，主要都市の市場地区設置なども含まれていた。市場監査官において市場秩序を維持させ，市場税や関税などの租税負担を軽減し，遠隔地で活動する商人を保護するなどの施策を行って，遠隔地間の経済活動の促進に貢献していた。ファーティマ朝（10世紀後半～12世紀）では，エジプト

---

32) キリスト教の清貧思想や徴利禁止が中世前期の西欧社会に与えた影響については Heck (2006: 22-38) に詳しく論じられており，他方中世イスラム世界特有の資本と労働の概念，徴利（リバー）禁止，利潤追求の受け入れについては Heck (2006: 82-86)，ならびに加藤 (2005: 96-101) を参照されたい。

の主要都市において公共仲介取引所，工業団地，アウトレット，倉庫，宿泊所，浴場などが整備され，紅海から地中海に至る交易活動の拠点となるようにエジプトの主要都市の活性化が図られていた。これらの政策は，次のように叙述されるように，自由な経済活動を醸成させていたものであり，一種の自由放任政策であったともいわれる<sup>33)</sup>。

「アッバース朝国家の経済政策はおおむね開放的であって，一定の関税および市場税を支払うことによって商人・手工業者たちは国境を超えて移動することができた。」(家島 1991: 241)

「『ファーティマ経済奇蹟』と呼ばれるものが，エジプトのレッセフェール経済における王朝の非干渉政策によっていたことは，ゲニザ文書研究者ゴイテインが述べている通りである。」(Heck 2006: 123)

いわば中世の商業資本主義ともいうべき経済活動が中世イスラム世界で出現した条件としては，第一に天然資源や資本が神によって与えられたものであるのに対し，人間の活動の成果，すなわち労働の対価が人間の正当な財産として認められており，商工業活動も労働の一環とされたことである。第二に，したがって商業における利潤追求も人間の活動の視点から正当化され，その価値尺度となる貨幣の価値は，アッバース朝やファーティマ朝国家による貨幣供給政策により安定的に維持されてきたことである。第三に，長期の資金調達形態として共同出資経営（ムダーラバ *mudārabah*，キラード *qirād*）が商人や出資者の間で広範囲に採用されてきたことである。最後に，商業行為上の資金を融通する金融仲介者と金融手段が発達し，信用経済が展開されたことである<sup>34)</sup>。

この最後の金融仲介手段としては，サック (*ṣakk*：小切手)，ルクア (*ruqah*：信用状，商業手形) や，カット (*khatt*)，タウキー (*tawqī*) などの信用手形が存在して，支払い手段として使用され，スフタージャ (*suftajah*) と呼ばれる一種の為替がイスラム世界で資金移転手段として使用されていた。その担い手として，ジャフバズと呼ばれる公的資金取扱吏を兼ねたマーチャント・バンカーが存在し，公的資金管理，預金，信用状・為替発行，貸付，宝石仲介などの業務を取り扱っていた。その他にサッラーフと呼ばれる両替商も主要都市にいて，両替，小切手・信用状発行などの業務を行っていた<sup>35)</sup>。金融仲介者はスフタージャや

33) 家島 (1991: 236-41)，加藤 (2005: 117-20)，Heck (2006: 120-26)。

34) Heck (2006: 127-57)。

ルクアなどを通じて、地方商人との取引を口座決済し、遠隔地取引のための公的信用手形として使用させることにより、交易決済や資金移転の便宜を提供していた。また一部には *overdraft* (当座貸越) にも応じ、商人たちの資金需要にも応じていた。しかしながら、スフタージャ (為替) に関しては、これら金融仲介者 (ジャフバズ) は専門に扱うというより名声と社会的関係によることが大であったともいわれる<sup>35)</sup>。

ジャフバズは徴税業務や資金移転などの公的資金管理に携わっていたのであるが、その動きは、宮殿内にはジャフバズたちが絶えず控えている場所があって、10世紀初めにジャフバズ庁が設置されたという記述に象徴されるように、国家の財務管理は彼らに委託されるようになっていた<sup>37)</sup>。10世紀前半、アッバース朝の支配領域が縮小した状況下でも1,450万ディナール余の税収があり<sup>38)</sup>、サワード、イラン、シリア・パレスティナ、エジプトの各地から租税がバグダードに送金されていた。その際、各主要都市に公的資金を扱うジャフバズがいて、租税を受領して、その程度は確定しがたいが、為替 (スフタージャ) を使って中央に送金しており、バグダードのジャフバズがその受け手になって中央政府の資金管理の業務を実質上担っていた<sup>39)</sup>。中央政府が一時的に歳出超過になって資金が枯渇した時に、宰相がジャフバズや有力商人から租税予定額を担保に借入れをするような事態になっていた<sup>40)</sup>。地方と中央の間にジャフバズを介して公的資金が移動し、税収を担保に国家が借入れを行うという状況が出現し、なおかつ国家関係者を含めてそれら支払いがサック、ルクア、スフタージャといった信用手形により行われていたという点で、すでに信用経済がかなりの程度までに進展していたといえる。

さらに地方から中央への恒常的な資金移転がかなりの程度為替を通じて行われていたとすると、それが持続可能であるためには、租税の送金とは逆方向に

35) 岡崎 (1961), Goitein (1967: 240-50).

36) Udovitch (1979: 269-70, 272).

37) Fischel (1969: 5). ただし、カリフ・マアムーン (AD813-83) の代にジャフバズ庁の記述がみられるという。Abd al-Aziz Duri (2011: 173).

38) von Kremer (1888: 312-18). ちなみに地域別租税比率は、サワード 11%、北イラン 20%、南イラン 24%、シリア・パレスティナ 23%、エジプト 9%、アラビア 1%、その他雑税 12%であった。

39) 岡崎 (1961), 佐藤 (1981: 121-23).

40) 森本 (1975: 422-29).



資金の移転が存在する必要がある。つまり，地方から徴収された租税（金銀貨）が為替送金される場合に，中央への一方通行の資金流入であると，中央のジャフバズの手元資金は最後には支払い超過になって枯渇し，直接の現金移送にならざるを得ないからである。中央から地方への逆の資金移転があれば，中央のジャフバズは資金が枯渇せず，地方のジャフバズは潤沢な租税資金があつて為替支払いに応じることができる。この逆の資金移転を裏付けるものが何かというと，地方から中央へ送られる各種の産物の売上代金である。アッバース朝時代，バグダードが150～200万人に及ぶ大都市に成長したことからもわかるように，政治都市として発展した中央の諸都市は一大消費地でもあった。その消費需要をまかなうように，地元サワード地方を含め，周辺の地域から各種の産物が集積していたのである<sup>41)</sup>。

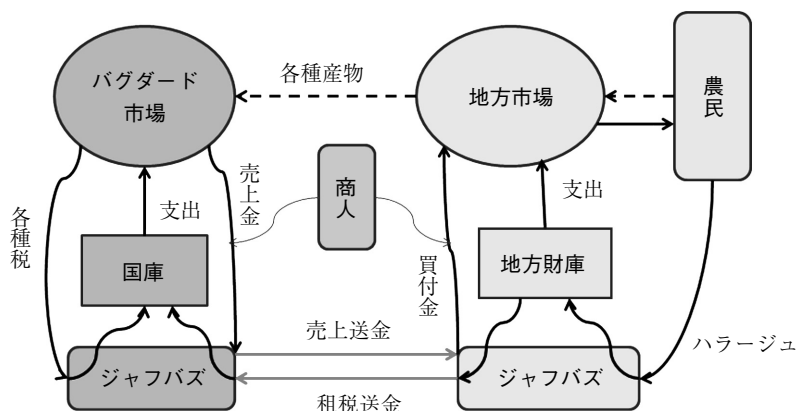
その運搬と販売に商人たちが関わっていたのであり，地方と中央を遍歴する旅商（ラッカード）たちは地方で産物・原料を仕入れ，中央へ運搬・販売していたのであるが，都市内での商品の購入・売却のためには都市部に倉庫を構えていた仲買商人（ハッザーン）を利用せざるをえなかったし，ハッザーンはラッカードむけに委託販売や取次の機能を果たしていた<sup>42)</sup>。このほかにムジャッヒズと呼ばれる輸出入問屋があり，各地に代理店を配置して遠隔地間の輸出入取引をおこなっていた。これら商人たちは，相互に資金と労働を提供して共同で商業経営を行うことが多く，その経営には商人のみならず，王族，高級官僚，軍人，両替商，地主など多様な投資家が参加するようになっていた。合資共同経営や（ムダーラバ，キラードといった）貸与型共同経営により，資金を調達して商業活動を行い，そこで得られた利益を分配する形をとっていた<sup>43)</sup>。地方から中央への物資の仕入れ・運搬と販売という流れに注目した場合，中央ないし地方で調達した資金を使って仕入れた物資を中央で販売するという商業活動によって得られた代金の一部を，商人たちは為替を通じて中央と地方の間を送金

41) バグダードへの物資の運輸と集積・貯蔵については家島(1991: 218-21)を参照。

42) 11世紀のゲニザ商人を取り上げると，彼らが地方の一次産品を買い上げ，加工や梱包の活動を通じ中央の市場にもたらしていたことがわかる。郊外や二次的町から加工一次産品や地方製造物を購入し，地中海周辺の主要市場へ輸送・販売していたのである。Goldberg(2012: ch. 4)参照。

43) 家島(1991: 253-59)。ムダーラバ，イナーン，ムファワダなど共同経営（パートナーシップ）形態についてはUdovitch(1970)，Çizakça(1996)を参照されたい。

図3 アッバース朝経済：資金循環図



することができた。(地方で資金を調達した場合は販売代金を地方に送金し、中央で調達した場合は買い付け資金を地方に送金することになる<sup>44)</sup>。) 図3のように、租税の資金移転と産物の売上送金という、相反した資金移転が恒常的に成立することによって、ジャフバズの為替業務は持続できたのであり、このことからジャフバズは公的資金管理業務のみを行う金融仲介者でなく、マーチャント・バンカーでもあったと判断されるのである<sup>45)</sup>。

44) ウマイヤ朝では、国庫や地方財庫 (Bayt al-Mal) が商人に貸し付けを行い、その活動を容易にする手形交換所の役割を果たしていたといわれる。例えば、商人がバスラ属州の財庫から資金を借り入れて商品を購入して、ヒジャズで売却してヒジャズ属州の財庫に返済して決済を完了することができたのである。Imamuddin (1960: 26) 参照。おそらく地方財庫の間で各属州の口座が設定され貸借が記載されて、時期ごとに決済されていたのではないかと推測される。そしてその取扱いはジャフバズのような貨幣取扱吏に委託されていたとおもわれる。このような公的な融資機関が存在していれば、融資を受けた商人たちは身近の財庫に返済をし、送金する必要がなくなる。

45) 10世紀ユダヤ商人のネットワークについては Fischel (1969: 29-33) を参照。強力な商人たちのネットワークの下で、10世紀末のアッバース朝財政において手形がいかに重要な役割を果たしていたかは、11世紀の年代史家ルーズラーワリーの次の文章からも窺える。「敵国で商館向けに振り出された手形が受領されるということは何と輝かしいことであろうか。これこそ名誉の源泉と考えるべきとすれば、商人たちは東西の宰相よりも強力である。というのも、商人たちはその取引相手むけに多額の手形を振り出し、その手形が買物や地租のそれよりも容易に受領されるのだから。」 *The Eclipse of the 'Abbāsīd Caliphate*, eds. H. Amedroz and D. Margoliouth, (trans.) vol. VI: 143.

## 5. 中世ヨーロッパ世界

4世紀末にローマ帝国が東西に分裂した後、その西部地域にはゲルマン諸王国が成立して実質上東ローマ帝国とゲルマン諸王国による分割統治体制が成立した。その後、イスラム教の下にアラブ人が進出して、その勢力はササン朝ペルシャ領土を含め、地中海の南岸全域ならびにスペインに至るまで版図を拡大して支配体制を確立していった。地中海はイスラム帝国（ウマイヤ朝、アッバース朝）、ビザンチン帝国、フランク王国に分割されて、もはや「内なる海」ではなく、イスラム勢力の優位の下、相互に対立、戦火を交える国境の海と化していった。この鼎立体制の成立により、西欧社会は前期封建社会へと移行し、その成立の経緯に注目して、H. ピレンヌは「マホメット [ムハンマド] なくしてシャルルマーニュは考えることができない」と表明したのであった<sup>46)</sup>。ピレンヌ自身は、地中海交易がほとんど途絶するにあたり、中世社会は農村経済に近い状態で成立したものと想定したのであるが、その後の諸研究により西欧における交易活動は依然として活発であり、そのルートは地政学上変更を余儀なくされて、スペイン経由とロシア・北欧・東欧経由で、中東のイスラム経済とつながっていたことが明らかにされてきた<sup>47)</sup>。

これらの交易活動の存在は、しかしながら、当時の西欧社会の後進的または辺境的性格を否定するものでなく、地政学上の変化（つまり地中海交易の困難度の上昇）という要因により西欧社会がダマスカス、バグダード周辺の中核地域から遠く離れた辺境地域として再構成され、それが西欧社会の内陸的性格を深めて特有の封建社会を形成することになったという意味で、ピレンヌ・テーゼを再定義したものと考えることができる。

西欧の中世前期経済社会では、先の節でもふれたように、キリスト教の利益追求への抑圧的姿勢と徴利の禁止により、商人による利益追求活動は抑圧、制限されたものにならざるをえなかった。それが一躍状況を大転換させ、西欧社

46) Pirenne (1922: 訳 14).

47) ピレンヌ批判は『古代から中世へ』（佐々木克己編訳）所収論文を参照されたい。中世前期交易事情については Hansen and Wickham (2000), McCormick (2001) を参照。さらにイスラム側の見解を含めたピレンヌ・テーゼの解釈については家島 (1991: 152-63) を参照されたい。

会を全体として貨幣経済に大きく変化させる要因となったのが、11世紀末から13世紀にかけて遂行された十字軍による聖地回復運動であったと思われる。これにより西欧社会は一挙に中核地域と呼ぶべき中東地域へのアクセスが再開できたのであり、中東向けの交易が著しく活性化することになった<sup>48)</sup>。中東交易は貨幣の流通を促し、西欧社会に貨幣の使用を再認識させることになった。中東から西欧を結びつける拠点として北イタリアの都市は重要性を高め、その中でヴェネチアやジェノヴァは中東交易の独占化を図ることになった。その過程で、海上交易者と投資家(資本提供者)を結びつける共同出資経営(コンメンダ)を発展させていったことはよく知られている通りである<sup>49)</sup>。

また中東から北イタリア、フランドル、イギリスに至る交易ルートが活性化し、物資と銀貨・銀塊が相互に流れるようになり、付随して10世紀には採掘され始めていた南ドイツ、中欧の銀山が、十字軍の戦時需要と交易の活性化に合わせて、銀産出量を増大させていった<sup>50)</sup>。その多くは西欧社会を循環するだけでなく、中東の貿易収支の赤字分を埋める資金として海外に流出していった<sup>51)</sup>。このような商業の復活と貨幣経済の進行に合わせて、金融仲介者とくにマーチャント・バンカーと呼ばれる銀行家が、交易の担い手として商人たちが活躍していた(フィレンツェ、シエナ、ピアチェンツァ、アスティなどの)北イタリア中部都市の中から登場してきた<sup>52)</sup>。ロンドン、ブルージュ、トスカーナ諸都市、ヴェネチア、ジェノヴァを経て中東に至る交易が活発化するにつれて、

48) 中世における地中海交易の重要性については齋藤(2002: 129-48, 177-205)を参照されたい。

49) コンメンダの起源については、ビザンチンの *chreokoinōnia*、ユダヤ *'isqua*、イスラム *qirād* のように似た形態があったことや古代ローマの海上貸付 *pecunia traiecticia* (*nauticum fenus*) に遡ることができるとの指摘もある。Udovitch (1960), Pryor (1977)。第2節で言及したように、古アッシリアの *naruqqum*、古典期ギリシア *εκδοσις* のように古代にも共同出資型のパートナーシップは存在していた。ただし、ジェノヴァでは13世紀末になるとコンメンダが遠距離交易ネットワークの社会的構造変化に対応しなくなり、信用ネットワークの中で専門化が進行し、貴族層の信用供与上のシェアが増大していった。結果、多様な投資家を取り込んでいたコンメンダは急速に衰退し、信用供与手段は海上為替 (*maritime exchange*) にとって替わっていった。15世紀初めには貴族ファミリーの多くのメンバーが銀行家として記録されるまでになった。Van Doosselaere (2009: 119-20, 131-35, 161)。中世・近世期のイスラムと西欧におけるムダーラバ、コンメンダ、合資会社 (*joint-stock company*) の比較制度的視点からの議論については Çizakça (1996) を参照されたい。

50) Spufford (1988:ch.5).

51) Spufford (1988:ch.6).

52) De Roover (1953:25), Kohn (1999b:3).

商業上のさまざまなサービスの需要、とりわけ金融仲介サービス（為替、振替、信用供与、保険）のニーズがたかまり、商業上の活動に加えて金融仲介に利益の機会を見出した北イタリアの富裕商人たちがマーチャント・バンカーとして経営を多角化してきたのである。最初は両替から始まって、振替や為替を通じた資金移転の便宜を提供していたのが、微利の禁止という壁を乗り越える工夫が為替業務を通じて案出され、信用供与（貸付）にまで拡大していった。このことが西欧における銀行業と貨幣市場の発展という道筋をつける端緒となったのである。

このような為替業務が中世後期のイタリアにおいて活発化した要因としては、第一に先進地域というべきイタリアにおいて、分立する王国・公国、都市国家ごとに多種の通貨が流通していたことであり、このために両替のニーズが高まり、両替商が活躍することになったことがあげられる。これは派生して預金口座間の振替業務を進展させ、両替商を預金振替銀行に発展させることになった。第二は、イタリアのみならず欧州大陸を縦断する交易ルートが発展し、その中継点となる地域に（シャンパーニュ大市のような）大市が開かれて、大量の取引が行われて多額の売上代金を本拠地に移転する必要がでてきたが、直接の現金輸送は治安の理由からきわめて危険を伴う行為であった。そのため、直接の現金輸送をとまなわない、為替による資金移転のニーズが商業の発展と物資の移動が盛んになるにつれて高まったのであり、シャンパーニュ大市などにおいてイタリア商人と両替商が為替業務を通じて活躍するようになったことである。最後に、欧州内の資金移動については商業上の要因のみならず、欧州各地の教会・修道院からローマ（14～15世紀にはアヴィニョン）へ向けて（拝領地地代、手数料、寄付、聖職禄納入金、十字軍支援金などの）資金が恒常的に流れていたことである<sup>53)</sup>。これは規模としては一王国の規模であったとしても、恒常的に貨幣が欧州各地からイタリアに流れており、それが各地からの物資や中東からの交易品の消費を生み出していたという点で、欧州内の資金循環の一翼を担っていたのであり、この点で教会を通じた資金の流れは無視できるものではなかった<sup>54)</sup>。そしてローマやアヴィニョンへの送金は、紆余曲折しながらもマーチャ

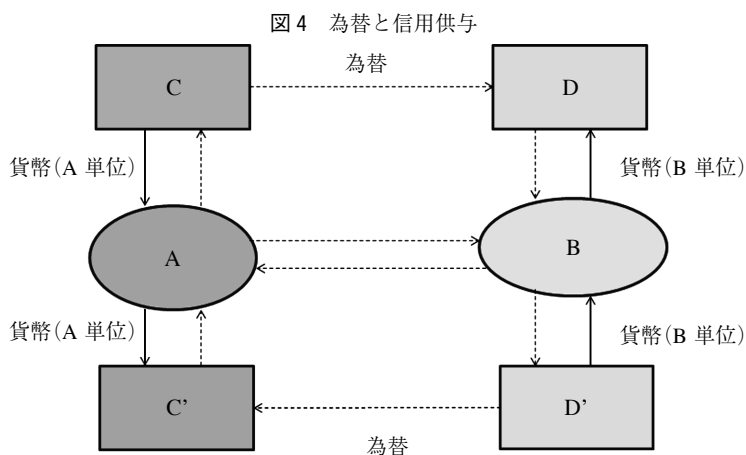
---

53) Moshenskyi (2008:83).

54) Renouard (1941: 98-99), Spufford (1988: 157-58). ちなみに1316～70年の間の教皇庁の年平均収入は16～26万フローリンの間にあった。

ント・バンカーたちによって為替(公正証書)を通じて実現されていたのである。その他、十字軍や巡礼者、学生たちも資金の送金を必要としており、送金手段を為替などに頼っていた。十字軍などはジェノヴァやヴェネチアのマーチャント・バンカーから借入れをし、シャンパーニュ大市で彼らの代理人を通じて返済していたのである<sup>55)</sup>。

マーチャント・バンカーたちは、その本来の商業活動により構築したネットワークを通じて為替業務を拡大させてきた。為替による送金のメカニズムは図4に提示してあるように、買取/発出人(deliverer) Cから資金を振出人(taker) Aに支払い、為替手形を入手して、受取人(payee) Dに郵送する。一方、振出人から支払人(payer) Bへは通知状(avisa)が送られ、一定の期限(usance)後に受取人Dが為替手形を支払人Bに提示することにより、現地通貨に交換された当該資金が受取人に支払われる。このメカニズムは買取/発出人・受取人と振出人・支払人に主人・代理人関係とそれを支える郵便制度が組み合わさって機能することができる。マーチャント・バンカーは商業センター同士をつなぐネットワークと私的な郵便制度を整えることにより為替業務を常態化することができた。12世紀ごろから為替が散見されてくるが、当初は公証人によって作成された支払約束手形の形をとっていた。それが即時的な対応と便宜を提供するため、マーチャント・バンカーの信用による非公式書状にとって代わっていき、より機能的な送金手段に進化していった<sup>56)</sup>。



55) Kohn (1999b: 10).

56) De Roover (1953: 38-41).

為替による送金システムは、商業上の物資移動と資金移動の内容を変えていく機能をもっていた。2つの商業センター間の貿易収支が均衡している場合、相互に為替を使うことにより、2つのセンター間の資金（銀貨、銀塊）の移動を省き、異なる通貨間の変動を小さくすることができた。収支が均衡していない場合でも、赤字地域から黒字地域への資金を最小限することができたのである。また商業センター a とセンター b の間に都市 c があってセンター a で商品を購入する場合、センター a からセンター b 向けに為替振出を行って購入代金を入手し、都市 c で販売した代金をもってセンター b で商品販売を行う予定の別の商人から為替を購入して郵送し、代理人を通じてセンター b でその商人から支払いを受けて先に振り出した為替の支払いに振り向けることができる。これによってセンター a, b と都市 c の間に商品の移動があっても資金の直接の移動を省くことが可能となり、資金の移動はセンター間に集中してその絶対量を省くことができる<sup>57)</sup>。その際、為替振出や代理人による受取・支払などの仲介業務をセンター間に代理店・代理人を置くマーチャント・バンカーが担っていくわけである。（先にふれた教会が送金を為替により行い始めた一つの要因に、英国でイタリアマーチャント・バンカーが王室や修道院などと羊毛などの取引を独占的に請け負うようになったことがあげられるといわれる。英国の教皇税などの資金を、為替を使い送金するために、羊毛などを一手に購入してイタリアに送り販売することによりイタリアでの支払いを可能にしたのである<sup>58)</sup>。そこに為替業務と商業行為の一体性を垣間見ることができる。）

為替による送金業務から拡大して、マーチャント・バンカーは為替を通じて貸出業務を実質的に行っていくことになる。その手法が乾燥為替 *dry exchange* と呼ばれるものである。マーチャント・バンカーが商人に資金を貸し付けて為替手形を振り出し、発送先の代理人にその商人（代理人）から現地で支払いを受け、その資金でもって現地で戻しの為替を買い取って発送してその支払いを受けることにより、貸付返済は完了するというものである。発送先の通貨の交換レートと戻し先の交換レートを組み合わせ、現地の通貨が割高になるようレートがそれぞれ設定されることにより、返済時には利子に相当する分が組み込まれ、返済期間は地域間の距離に応じて実質上決定されることになる<sup>59)</sup>。返済

57) Kohn (1999b: 13-16).

58) Prestwich (1979: 88-90, 97-100).

期間を繰り延べる場合は、この操作を繰り返せばよいのである。さらにバンカーの代理人が帳簿上で支払いを受けたことにして、戻し為替を事前に決めたレートで自身振り出すことにより、為替レートの変動リスクを回避して資金を回収することができる(戻し付き為替 *ricorsa exchange*)<sup>60)</sup>。商人の資金需要に対応するために、マーチャント・バンクはこのような為替業務を通じて資金を提供するようになり、為替送付先と商人の商品購入先は一致する必要がなくなっていくた。早くも14世紀には、多くの為替手形は金融目的で発行されるようになり、例えば1336~40年にフィレンツェのコヴォニ商会で記載された443の為替取引のうち70が商業関連で、373が金融目的であったとされる<sup>61)</sup>。

さらに商業センターには預金銀行家やその代理人がいて、さまざまな商品の売買を行うが、その支払いは信用により行われ、最終的に預金されている銀行家の口座間の振替により決済されていた。支払いと受け取りの結果余剰となった資金は次の機会のために預けられ、不足の場合は *overdraft* の形で債務として記載されて、現金の収受を最小限にすることができた。商人たちはマーチャント・バンカーなどから為替を通じ資金を調達していたわけであり、為替送金や銀行口座振替を使い、現金の移動を極力省くことができたのである。したがって、物資が集まる商業センター(都市)には、このような預金銀行家やマーチャント・バンカーたちが集まり、取引決済と資金調達のための機能が自然と発達し、貨幣市場が形成されたようになった。結果、商業センター間には商業上のネットワークだけでなく、金融上のネットワークも形成され、資金調達と送金需要により振り出された為替が期限を迎えるに至り、その支払いと受け取りを清算する必要が出てくる。商業目的で定期的で開催されていた中世の大市は、商業上の取引が次第に商業センターとなる中心都市で恒常的に行われるようになった結果、マーチャント・バンカーたちが商業センターに集まって為替業務を行うようになり、為替の振出や支払い、決済を行い、商人たちの資金需要に応える金融市場を形成していった。とくに中心的な商業センターは主要都市を結ぶ為替ネットワークの拠点(金融センター)となり、付随して補完する

59) また、受取人が為替手形を拒否することにより買取人に戻し、振出人に返却を求める場合があり、返還レートは2つの場所の為替レートが使われて算出されるため、同様の利子を組み込むことができた。

60) 大黒(1990: 124-31), Kohn(1999b: 7).

61) Kohn(1999b: 9).



ように1つか2つの副センターが形成されていった<sup>62)</sup>。

為替ネットワークの中心となる金融センターは時代とともに変遷していった。12世紀末から最初のセンターとなっていたのがシャンパーニュ大都市であったが、それが14世紀初めに衰退していくと、その中心的な機能は商業センターとなっていたヴェネチアに移り<sup>63)</sup>、大陸北岸の商業拠点となっていたブルージュは副金融センターとしての機能も果たすようになっていった<sup>64)</sup>。15世紀前半には金融センターはジュネーブ大都市に移り、1444年になるとリヨンが北イタリア銀行家にとって中心的な根拠地になった<sup>65)</sup>。その後、15世紀後半から16世紀前半にかけてアントウェルペン（アントワープ）が商業の成長と共に中心的なセンターとして台頭し、リヨンのライバルになっていった<sup>66)</sup>。スペインのメディナ・デル・カンボも副センターとなってアントウェルペン・リヨンの為替ネットワークを補完していった<sup>67)</sup>。そののち、宗教戦争などにより政情不安もあって、1534年にジェノヴァ銀行家を中心にしたマーチャント・バンカーたちは金融センターをブザンソン大都市に移し、その後北イタリアのサヴァナからピアチェンツァ、ノヴァルに移していった<sup>68)</sup>。

金融センターでは為替による送金、資金調達、(計算貨幣を通じた)為替レートの決定や債務の決済・相殺などの機能が果たされていたのであるが、後者の決済・相殺機能は金融取引上必要不可欠な部分となっていた<sup>69)</sup>。シャンパーニュ大都市をはじめとしてヴェネチア、ジェノヴァ、ブルージュ、リヨン、メディナ・デル・カンボなどの都市のように、決済機能は商業センターとして発展した中からシステムとして生まれていた。商業センター内に預金銀行が存在して、資金収受や振替を、銀行を通じて行うようになっていた。それに対して、商業

---

62) Kohn (1999b: 17).

63) Meuller (1997: 303-14). ミュラーは、フィレンツェ人がシャンパーニュ大都市衰退後、ヴェネチアを金融センターに選んだ要因として、金塊取引市場、信用需要の旺盛さ、商取引の季節変動の規則性があげられると述べている。

64) De Roover (1948: ch. 4), Murray (2005: 229-58).

65) Boyer-Xambeu et al. (1994: ch. 4).

66) Van Der Wee (1963: 140-41, 337-40).

67) カスティリア大都市、リヨン大都市、ブザンソン大都市については、さらに名城 (2008: 39-43) 参照。

68) De Roover (1953: 78).

69) 計算貨幣の成立については De Roover (1953: 75-77) を参照されたい。

センターとは独立して決済センターとしてのみで機能していたのが、ブザンソン大市（ブザンソン、ピアチェンツァ、ノヴァル）であった<sup>70)</sup>。ジェノヴァ銀行家を中心にして16世紀前半に為替取引の決済センターとして設立されたのであり、マーチャント・バンカーたちが集まって、互いに受取人と支払人となる発行済の為替手形の金額を記載した帳簿を持ち寄り、その手形の受け入れや拒否を表明したのち、実際の決済を行って互いの請求額を相殺した。その後で残る支払い残高の決済は、他のバンカー向けの為替手形を譲渡して相殺手続きに回すか、次回の大市や別の場所での支払いを約束した新しい手形を発行するかで終了していた。このような手続きで、ブザンソン大市では約3分の1の手形がバンカーの帳簿上の相殺で決済され、残りのほとんどは新しい手形を発行することにより決済が完了していたといわれる<sup>71)</sup>。

ブザンソン大市とは別に例外的であったのがアントウェルペンである。16世紀になりスペインとの関係からブルージュに代わって商業センターとして繁栄しながらも、ブルゴーニュ領の支配者が1480年代に預金銀行を禁止した経緯から、銀行を通じた決済システムが発展せず、代替的手段として債権譲渡に訴える決済システムが生み出されたのである<sup>72)</sup>。16世紀前半においてアントウェルペンで取引を行っていた（ブラバント、フランドル、イギリス、ハンザ諸都市、スペインなどの）商人たちは、債務証券 (letter obligatory) という商業信用手段をもって負債を記録しており、したがって決済向けに譲渡される対象も債務証券であった。当初は満期後の証券が手形交換所で譲渡されていたが、後に満期前のもも譲渡対象になっていき、債務証券は持参人に対し支払われるようになっていった。そのために譲渡ごとに証券の裏面に譲渡人の名前が記載されることになり、発行人が支払い不履行になったときに、他の譲渡人に請求することができるように慣習化されていった。この持参人に対する債務証券の譲渡可能性 (negotiability) が1536年にアントウェルペンでカール5世の勅令により法的に確立し、1541年には低地地方全体に拡大していった。これはまもなくイギリスやハンザ諸都市にも適用されるに至ったのである<sup>73)</sup>。

70) De Roover (1953: 81).

71) Kohn (1999b: 22), Boyer-Xambeu et al. (1994: 76-82).

72) De Roover (1948: 339-41), Van Der Wee (1963: 357-60).

73) 中世の債権譲渡の事情については De Roover (1953: 83-94), Van Der Wee (1963: 340-47), Kohn (1999b: 25) 参照。

債務証書（ならびに為替手形）が裏書により譲渡可能となっていくと、それらは一種の兌換紙幣と似た機能をもつことになり、アントウェルペンで取引を行う商人たちは、それら証書を支払い手段として使うようになり、結果、満期前の証書は10～20回（多い時には100回）持ち主を換えていった。証書は最終的には最初の発行者に回収されて決済が完了するが、アントウェルペンの手形交換所では1日に何度も支払い取引が集中することから、その相殺は容易にできるようになっていた。また満期後の証書は現金化されるのであるが、その満期日が特定の期日に慣習的に設定されていたため、相殺がより容易になっており、現金化の機会が最小限になるよう工夫されていた。満期前の証書は、貨幣取引者（kassiers）と呼ばれるブローカーにより割り引かれて買い取られていた。当初は満期後の証書のみを買い取っていたが、1541年の勅令により満期前の証書を割り引いて扱うようになった。同様に為替手形もアントウェルペンでは扱われるようになり、割引の対象になっていき、1550年代には全く一般的になっていた<sup>74)</sup>。

このような手形交換所の設置と債務証書（商業手形）の流動化は、譲渡可能性の法的保証とともに発展したといえるのであるが、銀行を通じた決済（口座振替）が歴史的な事情により整備されていなかったことに負っていたともいえる。しかし、銀行振替の不備の中で続いていた取引関係者の決済の効率化を求める動きは、公的な決済銀行を設立して取引参加者がすべて公的銀行を通じ取引決済を行うという決済システムの案出に辿りついていった。それは、1都市で行われる取引がすべて公営銀行の口座振替で行われるように政府の保証のもとでもしくは強制化されて実施されたのである。このシステムを実質上最初に取り入れたのが、1587年営業を開始したヴェネチアのリアルト銀行（Banco della Piazza di Rialto）であった。一連の民間銀行の破綻を契機に政府が支払い専門の公的銀行の設立に動いたのである<sup>75)</sup>。1609年に低地地方（オランダ）で設立されたアムステルダム市立振替銀行は民間振替銀行の不備の中で強制的な形で取引の振替・決済が行われる場となった。アントウェルペンからアムステルダムに国際的商業センターが移っていく状況と連動して、その設立は近代的な国際

74) Kohn (1999b: 26-27). さらにアントウェルペンの債権譲渡と割引買取については De Roover (1953: 95-100), Van Der Wee (1963: 49-52), Puttevils (2015: 116-28) を参照されたい。

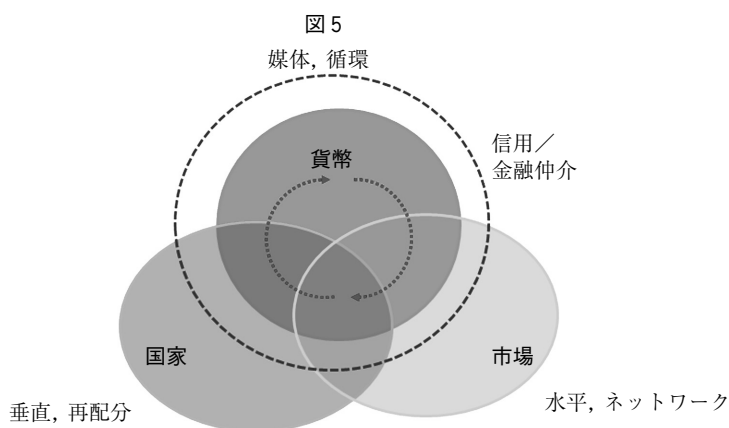
75) Meuller (1997: 110-18), Kohn (1999a: 23-25).

決済システムと信用制度が成立していくことを意味していたのである<sup>76)</sup>。

## 6. 貨幣経済を理解するために

これまで議論されてきた4つの事例を念頭において、前近代社会における貨幣経済を再構成してみることにしよう。序論でも述べたように、貨幣が扱われる世界では、国家の統治手段としての貨幣と市場の中で交換媒体として使用される貨幣が現れ、ともに交差して物財を流通させていた。国家は権力の階層構造として表され、その必要とされる物財は、租税・貢納物の形で納められ、官僚や軍隊または従属する集団などの構成要員に再分配されて、いわば垂直的移动の形で物財が受取られ支出されていた。この原初的な再分配システムに対し、国家はその一部分を支払い手段としての貨幣に置き換えることにより物財の実物的な移動を節約して、統治のコストを削減しようとしてきた。

他方、市場の世界では交換を行う諸集団が、互いにネットワークを張ることにより情報交換を容易にし、欲望の二重の一致をみだす対象者を探す費用を節約するために貨幣を使用してきた。どちらの世界においても企業者／商人と呼ばれる集団が存在して、貨幣を媒介にした循環過程の形成に役立ってきた。図5はこのような事情をふまえて、貨幣が導入・使用されるにしたがって国家の領域と市場の領域をつなげ、統合していく状況を表現しており、前近代社会に

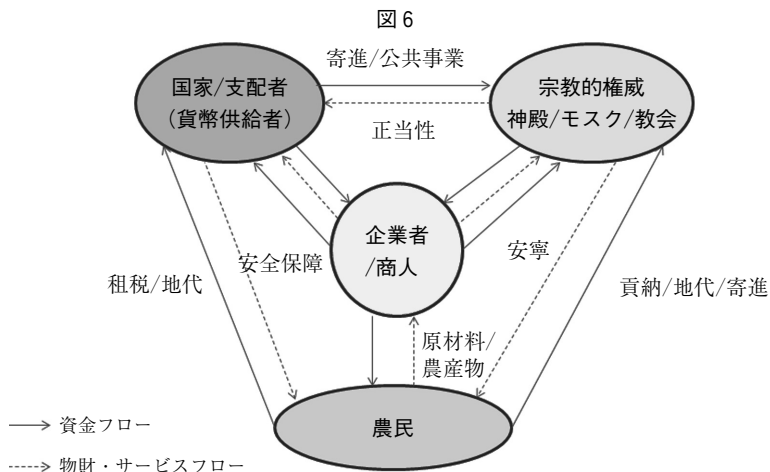


76) 名城 (2008: 63-66, 68-69). アムステルダムの貨幣市場の発展と公営振替銀行についてはさらに Gelderblom (2013: 70-71) を参照されたい。

における貨幣経済を縮約して描いている。

国家機構に入り込む租税・地代としての貨幣は、その構成員各層に分配されて、各階層の政府構成員はその支給された貨幣をもって市場にアクセスして望む物財を購入・消費する。市場に入った貨幣は循環して最終的に生産者である農民に辿りつき、租税・地代の原資となる。その間にあって、企業者／商人は2つの領域にまたがる、資金循環を促進する担い手として存在していた。国家はまた貨幣の独占的供給者であったのであるが、鑄造量の限界と退蔵化の風潮があって流通する貨幣量は絶えず不足ぎみであった。流動性不足を補う形で金融仲介者（両替商、銀行家、マーチャント・バンカー）が富裕な企業者／商人の中から分化し出現して、信用を供給することにより貨幣の領域を拡げて国家と市場の統合領域を拡大させていったのである。

前近代社会の担い手は、図6で描かれているように、国家／支配者、宗教的権威（神殿／モスク／教会）、企業者／商人、農民の4者で図式的に描かれる。農民は国家と宗教的権威を物質的に支える存在であり、国家は安全保障や公共事業を提供するとともに、寄進などを通じて宗教的権威を支援する。宗教的権威は支配者の統治の正当性を補強するとともに、民衆（農民）に対し宗教的な安寧を提供している。その中で企業者／商人は仲介的主体（交易者）として存在するが、貨幣が導入されるとその存在は一躍際立ってくる。物財の実物的移動（再分配）に加えて、市場を通じて（貨幣交換により）必要な物資を購入、売却して国家や宗教的権威に提供する。



国家は貨幣供給者としても行動するが、貨幣は企業者／商人の仲介活動を通じて農民層にまで供給され、租税・地代の貨幣納分や農具その他製造物などの購入に回されていた。企業者／商人はこの点で資金循環のポンプ役を担っていたわけであり、貨幣経済化の過程で顕在化してくる流動性不足を補うように、信用状、小切手、為替などの貨幣代替物（信用）を提供して経済の運行をスムーズにさせていた。また貸付という金融活動を行うことにより、資金循環過程を一層促進させていたのである。

前近代社会では、実物的移動（再分配）の領域は堅固に存在し続けていたのであるが、資金循環の領域は古バビロニア時代においてすでに一定のシェアを占めていた。そのシェアは時代とともに拡大してきたが、貨幣を媒介させる金融仲介者の存在はその中でより際立ってきたといえる。とりわけ、貨幣経済化が遅れたエジプトにおいて、その機能を補うように国家の財務機能を補完する形で（民間請負による）王立銀行制度が導入されたことは、パピルスという筆記媒体の存在も手伝って、帳簿による資金移転（振替）を発展させた点で注目すべき事例であった。

この伝統は、ローマ帝国時代を経て中世イスラム世界にも受け繋がれていった。イスラム教を通じた社会経済は、商業・手工業を担う企業者／商人の活動に寛容であった。結果的にその支配者たちは安定した通貨制度と商業・産業インフラを提供し、経済活動を促進させて中東を経済的中心地にしていった。微利（リバー）の禁止という宗教的制約があったとはいえ、イスラム世界特有のパートナーシップ（ムダーラバ）とルクア、サック、スフタージャなどを提供した金融仲介者（ジャフバズ、サッラフ）は明らかに生産と交易の発展に寄与していたのである。

しかしながら、西欧社会から中東へのアクセス（十字軍遠征）とペスト流行により、イスラム世界は後続者である西欧社会に追い越され、その格差は時代とともに拡大していった（長き分岐）。その原因に、イスラム相続法に絡んで法人概念が未発達の状態に置かれたことや、政府と宗教的権威との間に生まれた協調的独占的支配構造の下で企業者／商人層は革新的な行動を抑圧されてきたことなどがあげられている<sup>77)</sup>。それに対して、西欧社会では中世後期以降、国家／支配者や宗教的権威レベルで多種・多様化して、相互に競争し牽制しあう状態にあったため、企業者／商人は都市を舞台にして相対的な自立性を獲得し

ていった。同じ微利の禁止という環境にありながらも、長期的には企業者／商人は為替、政府貸付、証書割引などを通じて金利の存在を実体化していったのであり、為替、振替業務を通じて銀行業を発展させ、手形売買を通じて手形取引所や振替決済に特化した公営振替銀行を生み出していったのである。

イスラム世界と西欧世界の分岐現象を説明する議論を単純に一元化することは難しいかもしれない。乾燥／オアシス・灌漑世界と湿潤／森林世界という異なる環境は、中東における協調・独占と西欧における競争・牽制という地政学的状況を説明する一要素になりうるであろうし、歴史的偶然性が経路依存という道程を通して異なる状況を作り出し、分岐を生み出したのだという見方もありうる<sup>78)</sup>。いずれにせよ、時代ごとに大変化をもたらす革新的な要因の中から、貨幣経済の成立と付随して生じる企業者／商人部門が果たす仲介的活動の革新性を見落とすことはできないものと思われる。

#### 参考文献

- Abd al-Aziz Duri (2011), *Early Islamic Institutions: Administration and Taxation from the Caliphate to the Umayyads and Abbāsids*, I. B. Tauris
- Bagnall, R. S. and R. Bogaert (1975), "Orders for Payment from a Banker's Archive: Papyri in the Collection of Florida State University," *Ancient Society* 6: 79-108.
- Bogaert, R. (1966), *Les origines antiques de la banque de dépôt: Une mise au point accompagnée d'une esquisse des opérations de banque en Mésopotamie*, A. W. Sijthoff-Leyde.
- Bogaert, R. (1994), *Trapezitica Aegyptiaca. Recueil de recherches sur la banque en Égypte gréco-romaine*, Edizioni Gonnelli.
- Bogaert, R. (1998/99), "Les opérations des banques de l'Égypte ptolémaïque," *Ancient Society* 29: 49-145.
- Boyer-Xambeu, M., G. Deleplace and L. Gillard (1994), *Private Money and Public Currencies: The 16<sup>th</sup> Century Challenge*, M. E. Sharpe.
- Çizakça, M. (1996), *A Comparative Evolution of Business Partnerships: The Islamic World and Europe with Specific Reference to the Ottoman Archives*, Brill.
- De Roover, R. (1948), *Money, Banking and Credit in Mediaeval Bruges*, The Mediaeval Academy of America.
- De Roover, R. (1953), *L'évolution de la lettre de change, XIVE-XVIIIe siècles*, Librairie Armand Colin. (楊枝嗣朗訳「為替手形発達史—14～18世紀—」『佐賀大学経済論集』19(1), 1986: 106-56, 42(2), 2009: 29-63, 42(4), 2009: 117-43, 42(6), 2010: 83-108, 43(1), 2010: 73-100, 43(6) 2011: 143-76, 44(1), 2011: 63-92.)

---

77) Kuran (2011).

78) Rosenthal and Wong (2011: 229, 225-26).

- Fischel, W. (1969), *Jews in the Economic and Political Life of Medieval Islam*, KTAV Publishing House.
- Gelderblom, O. (2013), *Cities of Commerce: The Institutional Foundations of International Trade in the Low Countries, 1250-1650*. Princeton.
- Graslin-Thome, L. (2009), *Les échanges à longue distance en Mésopotamie au 1er millénaire. Une approche économique*. De Boccard.
- Goddeeris, A. (2002), *Economy and Society in Northern Babylonia in the Early Old Babylonian Period (ca. 2000-1800)*, Peeters.
- Goitein, S. D. (1967), *A Mediterranean Society: Economic Foundations, vol. 1*, University of California Press.
- Goldberg, J. L. (2012), *Trade and Institutions in the Medieval Mediterranean: The Geniza Merchants and their Business World*, Cambridge.
- Hansen, I. L. and C. Wickham eds. (2000), *The Long Eighth Century: Production, Distribution and Demand*, Brill.
- Heck, G. W. (2006), *Charlemagne, Muhammad, and the Arab Roots of Capitalism*, Walter de Gruyter.
- Hicks, J. (1969), *A Theory of Economic History*, Oxford University Press. (新保博, 渡辺文夫訳『経済史の理論』講談社学術文庫, 1995.)
- Imamuddin, S. M. (1960), "Bayt Al-Mal and Banks in the Medieval Muslim World," *Islamic Culture* 34: 22-30.
- Jursa, M. (2006), "Agricultural Management, Tax Farming and Banking: Aspects of Entrepreneurial Activity in Babylonia in the Late Achaemenid and Hellenistic Periods," in *La transition entre l'Empire achéménide et les royaumes hellénistiques: 137-222*.
- Jursa, M. (2010a), *Aspects of the Economic History of Babylonia in the First Millennium BC: Economic Geography, Economic Mentalities, Agriculture, the Use of Money and the Problem of Economic Growth*, AOAT 377, Ugarit-Verlag.
- Jursa, M. (2010b), "Business Companies in Babylonia in the First Millennium BC: Structure, Economic Strategies, Social Setting," in M. Wissa, ed., *The Knowledge Economy and Technological Capabilities: Egypt, the Near East and the Mediterranean Second Millennium B.C. - First Millennium A.D. Proceedings of a Conference Held at the Maison de la Chimie Paris, France 9-10 December 2005*. Aula Orientalis Supplementa 26, Aula Orientalis.
- Kohn, M. (1999a), *Early Deposit Banking*, Dartmouth College, Department of Economics Working Paper No. 99-03. Available at SSRN: <https://papers.ssrn.com/abstract=151848>.
- Kohn, M. (1999b), *Bills of Exchange and the Money Market to 1600*, Dartmouth College, Dartmouth College, Department of Economics Working Paper No. 99-04. Available at SSRN: <https://papers.ssrn.com/abstract=151849>.
- Kuran, T. (2011), *The Long Divergence: How Islamic Law Held Back the Middle East*, Princeton.
- Lanz, H. (1976), *Die Neubabylonischen harrānu-Geschäftsunternehmen*, J. Schweitzer Verlag.
- Larsen, M. T. (1977), "Partnerships in Old Assyrian Trade," *Iraq* 39: 119-46.
- Lassen, A. W. (2010), "The Trade in Wool in Old Assyrian Anatolia," *Jaarbericht "Ex Oriente Lux"* 42: 159-79.
- McCormick, M. (2001), *Origins of the European Economy: Communications and Commerce, A. D.*



- 300-900, Cambridge.
- Manning, J. G. (2010), *The Last Pharaohs: Egypt Under the Ptolemies, 305-30BC*, Princeton.
- Menger, C. (1871), *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, Wilhelm Braumüller. (安井琢磨・八木紀一郎訳『国民経済学原理』日本経済評論社，1999.)
- Moshenskyi, S. (2008), *History of the Wechsel: Bill of Exchange and Promissory Note*, Xlibris.
- Muhs, B. P. (2005), *Tax Receipts, Taxpayers, and Taxes in Early Ptolemaic Thebes*, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Mueller, R. C. (1997), *The Venetian Money Market: Banks, Panics, and the Public Debt, 1200-1500*, Johns Hopkins University Press.
- Murray, J. M. (2005), *Bruges, Cradle of Capitalism 1280-1390*, Cambridge.
- Oppenheim, A. L. (1954), "The Seafaring Merchants of Ur," *Journal of the American Oriental Society* 74: 6-17.
- Pirenne, H. (1922), "Mahomet et Charlemagne," *Revue Belge de Philologie et d'Histoire* 1: 77-86. (「マホメットとシャルルマーニュ」佐々木克巳編訳『古代から中世へ—ピレンヌ学説とその検討—』創文社，1975: 3-14.)
- Prestwich, M. (1979), "Italian Merchants in Late Thirteenth and Early Fourteenth Century England," in *The Dawn of Modern Banking*, Yale University Press: 255-73.
- Pruessner, A. H. (1928), "The Earliest Traces of Negotiable Instruments," *The American Journal of Semitic Languages and Literatures* 44: 88-107.
- Pryor, J. (1977), "The Origins of the Commanda Contract," *Speculum* 51: 5-37.
- Puttevils, J. (2015), *Merchants and Trading in the Sixteenth Century: The Golden Age of Antwerp*, Routledge.
- Renouard, Y. (1941), *Les relations des papes d'Avignon et des companies commerciales et bancaires de 1316 à 1378*, Bibliothèque des Écoles françaises d'Athènes et de Rome.
- Rosenthal, J. L. and R. B. Wong (2011), *Before and Beyond Divergence: The Politics of Economic Change in China and Europe*, Harvard University Press.
- Spufford, P. (1988), *Money and Its Use in Medieval Europe*, Cambridge.
- Udovitch, A. L. (1962), "At the Origin of the Western Commanda: Muslim, Israel, Byzantium," *Speculum* 37: 198-207.
- Udovitch, A. L. (1970), *Partnership and Profit in Medieval Islam*, Princeton.
- Udovitch, A. L. (1979), "Bankers without Banks: Commerce, Banking, and Society in the Islamic World of the Middle Ages," in *The Dawn of Modern Banking*, Yale University Press: 255-73.
- Van Der Wee, H. (1963), *The Growth of the Antwerp Market and the European Economy*, Springer Science + Business Media.
- Van Doosselaere, Q. (2009), *Commercial Agreements and Social Dynamics in Medieval Genoa*, Cambridge.
- Veenhof, K. R. (1997), ""Modern" Features in Old Assyrian Trade," *Journal of Economic and Social History of the Orient* 40: 336-66.
- von Kremer, A. (1888), "Über das Einnahmebudget des Abbasiden-Reiches vom Jahre 306 AH (918-919)," *Denkschriften des phil.-hist. Klasse der Wiener Akademie*, 36, i: 283-362.
- von Reden, S. (2007), *Money in Ptolemaic Egypt*, Cambridge.
- von Reden, S. (2010), *Money in Classical Antiquity*, Cambridge.

- 明石茂生(2015)「古代メソポタミアにおける市場, 国家, 貨幣」『経済研究所年報』28: 163-236.
- 明石茂生(2017)「古代東地中海地域における国家, 貨幣, 銀行」『成城大学経済研究』217: 1-76.
- 家島彦一(1991)『イスラム世界の成立と国際商業』岩波書店.
- 岡崎正孝(1961)「イスラム帝国における前期資本家の一側面—とくに, ジャフバズについて—」『東洋史研究』20: 23-45.
- 加藤博(2005)『イスラム世界の経済史』NTT出版.
- 斎藤寛海(2002)『中世後期イタリアの商業と都市』知泉書館.
- 佐藤圭四郎(1981)『イスラム商業史の研究』同朋舎.
- 大黒俊二(1990)「為替手形の「発達」—為替のなかの「時間」をめぐって—」『シリーズ世界史への問い3 移動と交流』岩波書店: 113-39.
- 柘植一雄(1969)「プトレマイオス王朝」『岩波講座世界歴史2』岩波書店: 204-21.
- 名城邦夫(2008)「中世後期・近世初期西ヨーロッパ・ドイツにおける支払決済システムの成立」『名古屋学院大学論集』45: 27-71.
- 森本公誠(1975)『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』岩波書店.

(あかし・しげお 成城大学経済学部教授)